



VOL 40

2010年10月号

発行2010年10月6日

日本山岳会 山岳地理クラブ

URL www.jac.or.jp/doukoukai/

八十歳での八十里越

平野 彰

継之助の担架は八十里越を越えて行く。左足はすでに腐敗し臭気を放った。それにしてもこの長大さは、どうであろう。樹海は眼下にあり、道は天空に連なってゆく。

「八十里こしぬけ武士の越す峠」と継之助はわが姿を自嘲した。

これは司馬遼太郎の「峠」の一節である。

「松蔵、火を熾(さか)んにせよ」と戊辰の役(1868年旧暦8月)で八十里越を敗走して来た河井継乃助が只見町塩沢の矢沢宗篇宅で亡くなる前の言葉で自分を茶毘にする火を見つけていた。また治承4年(1180年)高倉の宮以仁王が会津から越後に逃れたのもこの峠と伝えられる。この八十里越は新潟県入道村下田(現 魚沼市)から福島県只見町入叶津まで8里(約32km)の山の中を通る街道である。その険しさゆえにその8里の道が10倍の八十里にも思えることから八十里の名がついた。南隣の六十里も同じ所以だが、こちらはいち早く開発が進み、トンネルや車道も整備されている。このようなことから山好きな中には一度この峠を越えて見たいと思っている人は少なくないようだ。

平成9年10月9日、三条からタクシーを吉ヶ平の小学校分校前で降りた。この峠は明治の半ば頃までは越後と南会津郡との重要な交易のルートであったが、時代の変遷と共に過疎化し、昭和45年11月に住民は集団で離村をしている。唯一残されたこの分校は、付近の山や山菜採りの人々の宿泊所として現在も活用されている。



メンバーはN氏をリーダーとして、70歳代後半が2人、そのうちの一人Y氏は80歳に近い。八丁堀の女赤ひげとも云われ、内科小児科の女医である。他に4人の、総勢7名は9時20分にこの分校跡を出発。「左雨生池へ右八十里越」の白い角柱の標識を見て右手八十里越へと進む。間もなく源綱頼の墓石に出会った。以仁王に従って、この地で亡くなった綱頼は源三位頼政の子で、宇治川の合戦に破れこの地まで逃れてきたと伝えられる。

1時間ほどで沢がありその清流の水がうまい。この辺りから道の欠落が目立つが椿尾根からのなだらかな道が続き南方には雪の薄化粧の守門岳が姿をあらわした。明るい日差しの番屋乗越しでは抹茶を立て一息入れるも、まだ全行程の3分の一のんびりしている暇はない。ブナ、トチなど



の巨木も多いが道は益々崩落箇所が多くなる。この辺りからY先生の足取りが重い。廃道に近い道が続く中、守門岳の頂上が我々の目線に近くなり、紅葉の色合いも濃くなってきた。時折新しい熊の糞もあり緊張を強いられる。午後3時空堀茶屋跡を過ぎ、3時30分ごろ殿様清水、この清水はまさに甘露、

持参の水筒の水を入れ替える。30cmほどのカメバチの巣があったがハチの姿は見えない。間もなく甲高い動物の声、先行の二人が立ち止まっている。近づいて見ると熊がいるという。さらに近づくと親熊の威嚇の声、腹に響く地鳴りのような迫力、子連れの熊だ。甲高い声は小熊の怯えた鳴き声ですぐ危険と感じ、100メートルほど戻り後続と合流。時間は4時を過ぎてい。いまさら引き返すことも出来ず、熊よけの笛を吹きながら、慎重に進むが熊はいち早く逃げ去ったようだ。寸断されたつづら折の急坂を上り詰めるとようやく鞍掛峠に着いた。時間は4時50分。小松峰5時05分あたりはかなり暗くなった。5時50分林道に到着。ここから宿の音松荘までは8~9kmの道程、携帯は不通、とにかく歩くのみ。70代のお二人にはかなりの疲れが見える。午後8時頃心配した旅館のご主人が奥様と小型トラックで迎えに来てくれた。これで11時間ほどの歩行がやっと終わった。このときのご主人はその後浅草岳の遭難に立会い雪崩に巻き込まれて亡くなった。翌日は朝からの雨で後半只見までの行程は次回に延期となった。来年はY先生も80歳をむかえ良いイベントとなるかと期待したが。



翌10年10月11日音松荘を出発。メンバーも一部入れ替えがあり、昨年参加のY先生は10日のみの参加で帰京された。日ごろ弱音を吐くことがなかった先生も前回は相当応えたのかも知れず80歳での八十里越を越える企画は未完で終わった。また前半、後半の片方だけの参加者はあらためてそれぞれに企画して欲しい旨の要請があったがいまだに実現はしていない。また熊との恐怖の出会い、ICI石井スポーツ店監修の「私の一名山」に参加者の奈良千佐子さんがその時の心境を詳細に記している。



10月2日(土) 9時30分に軽井沢駅に8名が集合、旧軽井沢駅前に展示してある遊園地の電車を少し大きくしたような草軽鉄道の機関車を見学。しかしこれが次回の旅の主役的存在になるかもしれないと言う事は誰も想像だにしない。

さっそく2台の自動車に分乗し浅間山峰の茶屋の東大火山観測所へと向かう。観測所の裏のトレンチで歴代の噴火堆積物の地層を見学。実際に目にすると天明の噴火の凄さが解る。

その後 小浅間山に登る。頂上は3つのピークに分かれていて、南側のピークには机の大きさ程の石とコンクリートの古い構造物が設置されている。最初は子午線標とも思ったが、山頂方向に向かって設置されている事から、浅間山の定点観測の台だったかも知れない。北側のピークに三等三角点が埋設されていた。

下山して草軽鉄道の国境平廃線跡を見学した。綺麗な木立の中を緩やかな線状の地形が確認される。自転車でも走れそうな道だ・・・と突然誰もなしに、自転車で完走したいという声が上がります。「カルメン自転車で故郷に帰る」も良いかも知れない。ここで遅めの昼食をとる。

その後旧北軽井沢駅舎を見学の後、鎌原観音堂と孀恋郷土資料館にて、天明の噴火の土石なだれによる遺跡物を見学した。そして北緯36度30分東経138度30分の交点を確認した後、今晚の宿のログハウスのペンションへ向かう。露天風呂に浸かりながら明日の天気を祈る。

3日(日) 朝からどんよりと曇り、いつバラバラと来ても可笑しくない天気だ。「晴れ女だから大丈夫！」という力強いお言葉の影からポツポツ?と、とりあえず雨具を身につけて8時に出発。



ログペンション前にて

天然記念物の溶岩樹形を見学するも、赤松林の中のこと故、松茸の誘惑に負けて、今回のアカデミックな目的から逸脱している者が若干名見受けられた。

その後、シャクナゲ園の駐車場から標高1820mの尾根山頂(園地)に向かう 10時到着。この頃になって空も次第に明るくなり、薄雲を通して太陽の光がこぼれ始めた。みんなの意見で計画通り上まで登ってみようという事になりさらに歩を進める。10時半に2046mの瓦礫の白ハゲに到着。この頃には雲は流れるものの、ほぼ晴天になり太陽の光

を受けた浅間山、前掛山、鋸岳、仙人岳の峰々が眼前に開ける。この誘惑に負けた若者二人はさらに標高2254mの鋸岳頂上を目指した。その間、待機していた者でブルーベリー



を収穫した。もしかしたら新年の例会に果実酒の甘いお誘いがあるかもしれない。昼食の後、13時半にシャクナゲ園に戻り、車坂峠を経て菱野温泉「雲助の湯」でゆっくり汗を流し、お土産のリンゴを買

って佐久平駅で解散した。

天気予報では3日は雨という予報でしたが、自称「晴れ女」と他称「晴れ男」の協力があり2日間楽しい山旅を過ごすことができました。

例会の議事録

9月定例会記録

2010年9月8日(水) 19:00~20:20 於JAC 集会室B

出席者8名、来客1名(平野、近藤、高橋、大西、長谷川、田中、関、西野(国土地理院) 今井(順不同)

内容: 10月、11月のAGC定例会は会場の集会室が確保できないため、**日程を10月は20日(水)、11月は11日(木)日に変更**するので注意願いたい。(近藤) 10月2日にJAC新会員のリエンテーションがあり、当日配布の同好会案内の資料提出を求められていることに対して、田中会員が文案を作り、添付メールで配信するので各員の意見を募った後、完成させる。(平野) 浅間山北麓の火山地形観察ほかの山行の申し込みは本日終了とする。9名が参加予定。(近藤) 先に当会で整理した旧版の地形図のデータ化が国土地理院によって行われ、JACヘデータ(tif)の提供と地図を返却した。(西野) 終了後「鮭の家」で懇親会(9名)以上 (記録 今井)

お知らせ

次回の例会

定例日ではありませんのでご注意ください

日時 **2010年10月20日(水)** 18:30から
於: 山岳会 ルーム
テーマ: 山行報告、ほか

AGC会員募集用のチラシ完成

田中会員によりAGC会員募集用のチラシが提案されました。



10月2日のオリエンテーションの配布資料として活用する予定です

AGCレポート vol-40 2010年10月6日発行
発行: 日本山岳会・山岳地理クラブ(代表・北野忠彦)
〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 日本山岳会 気付
TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441
編集担当: 近藤 E-mail: hikarikon@nifty.com